

# 文化力 — 市民と大学の協働



いの うえ たかし  
井 上 孝

早稲田大学大学院経済学研究科修了  
玉川大学助教授、東海大学教授を経て、  
現在東海大学特任教授(政治経済学部)。  
2001年より平塚市文化財団理事、  
現在、同財団理事長。



文化庁は、一昨年「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(改正版)を発表した。そこで、「文化力」なる用語を用いているが、それによれば「文化力」とは、「文化芸術のもつ、人々をひきつける魅力や社会に与える影響力のことであり、…国の力であり…文化芸術が経済活動において新たな需要や高い付加価値を生み出す源泉ともなっており、文化芸術が経済と密接に関連しあう…」としています。

さて、「文化力」なる用語が、日本語および外国語でいつごろから使われ始めたのか詳しくはしませんが、(注1)上の施策として、文化庁では、地域の「文化力」が日本の文化を高めるとして、そのために、地域の大学等との連携を通じて、文化力をまちづくりに活用することを謳っています。文化は芸術や財に限らず、広く生活様式や人間の知的な営みや振る舞いを指すわけですから、学術・芸術文化ということになれば、大学は「文化力」をもちあわせているといえます。

文化庁の提言をまつまでもなく、1985年、平塚市と東海大学は、心豊かな地域社会の創造と学術文化研究の振興等を目的として、市と大学の交流に関する申し合わせを締結しました。20数年間の交流は多岐にわたります。行政の審議会、研修や市民対象の各種講座・講演会、等における大学からの人材派遣、中小企業振興のための助言協力、大学公開セミナーへの市民参加、七夕まつりへの参加、スポーツの部活動指導・大会審判、図書館等施設の相互利用等、平成20年度の派遣教員だけでも、延べ66名になります。

芸術学科を中心とした芸術文化でいえば、恒例の第九の演奏会については、オーケストラを神奈川大学などとともに交代で担当しております。また、昨年末の財団創立

10周年記念・市民オペラ『カルメン』については、本学の音楽家梶井龍太郎教授が指導・出演で活躍しました。2004年に始めた「大人のためのピアノ教室」は、現在も教員・大学院生・卒業生により続けられています。こうした活動の中でも市民との協働で成果を上げているものがあります。それは、『エコ・ミュージアム 金目まるごと博物館』であり、まさに生活の場を舞台に、金目の歴史等に関する調査・研究発表等を、日本史学科の教員、郷土史家と熱心な地域住民とで行なっており、すでに4、5年間続いています。協働というと、しばしば市民と行政が取り上げられますが、いろいろな形が可能で、さまざまな分野で、市民と大学との直接の接触から、イベントや研究などが行なわれることが望ましいと思います。その協働こそが、地域の文化力になるのではないのでしょうか。

経済学の祖アダム・スミスも芸術の娯楽としての効能を認めますが、19世紀前半、スミスを筆頭とする古典派経済学を批判した後発国ドイツのF. リストは、古典派の価値論によるとバグパイプを製作する者は生産的であるが、それを演奏する名手は生産的とは言わないとなるが、それは間違いで、両者ともに生産的である。しかも、教育者、芸術家、医者等の精神労働、ならびにその成果はもっと重要で、これらは「生産諸力」を生産するのであり、この「国民生産諸力」が国民経済を発展させる、としました。文化の生産力説ともいえます。1841年のことですが、「文化力」のことでしょうか。

## 注1

少なくとも、1921年(大正8年)に、かの坪内逍遙が「文化力としての演劇の研究」という文章を朝日新聞紙上に書いているということである(筆者未見:生松敬三「文化の概念の哲学史」)。